



父の最期の地〈マーシャル諸島〉をめぐる74歳の旅と、島の暮らしに棲みついた戦争の記憶――

忘れた環礁は、憶えている



タリナイ tarinae

大川史織 初監督作品
プロデューサー／藤岡みなみ

映画「タリナイ」

コイシイワアナタハ 迎えてくれたのは日本語の歌でした

1945年4月。
ひとりの日本兵が戦地マーシャル諸島で
命を落とした。
補給が絶たれたことによる飢えであった。

2016年4月。
74歳になった息子は
マーシャル在住歴のある若者3人とともに
父が過ごした最期の地をめぐる旅に出た。

このことを二度とだれも体験しないような
世界にきつとてくれという

切実な思いが、映画を作った大川さんや
映された勉さんや、通訳や案内の人
などの背後に見えてくるという、
たいへん優れた映画ですよ。

映画作家 大林宣彦



comments

アジア・太平洋戦争中、日本の委任統治下にあった
マーシャル諸島では、約2万人の日本兵が命を落とした。

その一人、佐藤富五郎さんは飢えて亡くなった。

亡くなる数時間前まで書き続けていた日記は戦後、
戦友によって家族のもとに届けられた。

日本から遠く離れた太平洋の島での最後の日々が、
克明に綴られている。

2歳で父と別れ、74歳になった息子の勉さんは、
日記を手がかりに父の最期の地をめぐる旅に出る。
マーシャル諸島に住んだことがある若者たちが案内役となった。

道中目に飛び込んでくるのは、
旧日本軍が遺した建物を使った家、

錆びついた砲台で遊ぶ子供たち、
地中に埋まった電線を掘り出して作った手工芸品、
日本語の恋の歌を歌う人びと…

マーシャルの暮らしのいたるところに、
戦争の記憶が顔を覗かせていた。

ひとりの日本兵の魂を追いかけつつ、
不意にマーシャルの人々の「記憶」に触れ、慌てる。

これは、ただの慰霊の旅なのか？

美しい海と陽気なウクレレが心にざわめくドキュメンタリー。

佐藤さんの痛みを想像するとき、自分の限界を
いつも感じてしまう。カメラの眼差しが優しくかった。

—— 映像作家(「記憶の中のシベリア」) 久保田桂子

対象への謙虚な距離感を持った映像はそれゆえ、幸福にも
戦争を知らない僕らに自ら考えることを促してくれる。

—— 漫画家(「ベリリュウ 楽園のゲルニカー」) 武田一義

マーシャルの人たちの歌う歌に、私たちも応えていかなければならない。

—— 国立歴史民俗博物館教授 三上喜孝

青い海、島の音楽、そこで書かれた最後の日記。

繰り返されるそのループに、私たちの今が、
いかに特別かということが何度も何度も思い起こされました。

—— お笑い芸人・漫画家 矢部太郎



「マーシャル、父の戦場
—ある日本兵の日記をめぐる歴史実践」

大川史織 編
みずき書林 / A5判並製・416頁 / 2,400円+税

映画の詳細や最新情報は、公式Webをチェック。

www.tarinae.com

映画「タリナイ」ロゴデザイン:ワトナス 小田起世和
ポスターデザイン:景色デザイン室 古庄悠泰



2018 9月29日(土)より
アップリンク渋谷にてロードショー

UPLINK 渋谷

東京都渋谷区宇田川町37-18 ツツネビル1・2階
tel: 03-6825-5503 / web: www.uplink.co.jp

